

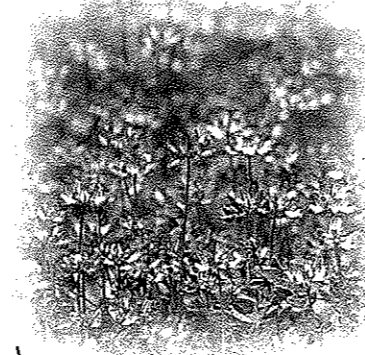
まいにち学校
まいにち街の中
こどもの笑顔に
つなげる

はじける ココロ

vol.32



津波の被害にあった石巻市女川地区を望む



被災地を訪問し、知ったこと、考えたことを報告

げんげのとは：れんげ草が生い茂った草原のこと。れんげ草は、茎が地に臥して広がり、春になると蓮の花に似た小花を咲かせます。また、れんげ草は緑肥として大地を肥やします。蓮に似た小さなれんげ草を、子どもたち一人ひとりの尊厳に見立てて、それが一面に花開く様子をイメージしました。

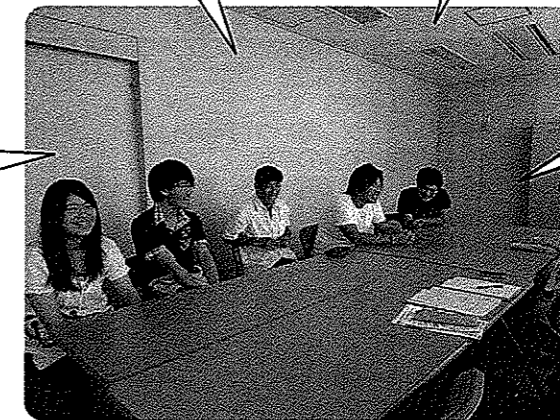
特集 1	大槌中学校訪問の取組 第一中学校生徒会	… 1 P
特集 2	スクールソーシャルワーカーってどんな仕事？ ～子どもの最善の利益をめざして～	… 3 P
連載	知ってる？ 市民のちから	… 4 P
	わたしの人権教育 箕面市立桜ヶ丘保育所 山田恵子さん	… 5 P
	司書さんのおすすめ本『パンプキン！～模擬原爆の夏』	… 5 P
	とどろみの森学園 右田ユミさん	… 6 P
	「うしろの正面、だあれ？パート2」 かわのひでたさん	… 7 P
	聴かせてよ「子どもの気持ち」～被災地を訪れて～	… 7 P

こんにちは。人権教育推進会議市民委員の宮本です。私は普段大学教育に携わっております。今回、インタビューに応じてくださったのは、東日本大震災から1年後の2012年3月10日、11日に被災地（石巻、女川、雄勝）を訪問された高校生3人、大学生、引率の方です。当日は、たくさんのお話を聴きましたが、紙面の関係上、概要のみお伝えします。

被災地に行くまでは少し怖かったです。実際に行ってみると、被害を受けた地域とそうでない地域のギャップが大きくて、衝撃を受けました。これからは、現地で体験したことを多くの人に伝えていきたいと思っています。

現実を体験し、大変ショックを受けました。ある小学校は、7割の方が亡くなったと聞きました。被災地を歩きながら、その空気の重さを実感しました。被災地に行って初めて気づいたことが本当に多かったです。また、太鼓を通して地域の方々と仲良くなりました。今後もこのようなつながりを大切にしていきたいです。

行く前は、現地はどんな状態だろうと不安がありました。被災地に着いて、言葉を失いました。被災者の年配の方から自分の母校が被害にあったお話を聞き、校歌をハーモニカで吹きながら泣いている様子に心を打たれました。戻ってから5か月が経ち、記憶が薄れてきたことを残念に思います。何か復興の役に立ちたいです。



インタビューに応じて下さったみなさん

被災地は大変という言葉を目にしますが、実は被害をそれほど受けなかった周辺地域も多くの困難に直面しています。なぜなら、復興全般にわたる十分な支援が受けられないからです。私たちは他人をうらやむことがありますが、それぞれ様々な苦境を体験されていることを今一度考える必要があると思います。被災地に行き初めて分かる事情がたくさんあることを痛感しています。

最近では被災地の様子があまり放映されていないので、意識が低くなっていたことを反省しました。被災者の方から、物を大切にすることへの気付きや、震災後のボランティアに感謝していることを聞きました。今後は、被災者の方とコミュニケーションを取っていききたいと思っています。

～インタビューを行って～

私はインタビューを通して、被災地の現実を知ることが大切であると感じました。そして、大学教育現場で震災について取り上げ、学生と共に議論する時間を持ちたいと思っています。ご協力頂いた皆さま、貴重なお話を本当にありがとうございました。

人権推進教育会議市民委員 宮本美能

人権教育推進会議情報誌 『はじける ところ』

発行 箕面市人権教育推進会議
箕面市教育委員会
人権教育課 TEL 072-724-6921 FAX 072-724-6010
e-mail: eduinken@maple.city.minoh.lg.jp
平成24年(2012年)9月
人権教育推進会議委員



八木晃介、河野秀忠、宮本美能、永田千砂、松岡淑子、井原芳朗、安東由紀子、上田晃江、尾上和美、中野淳子、主原照昌、笹内房子、岸本ミヨネ、中西庸介、山北 智、森崎直幸

現地に行くことの意味をどう考えていますか？
● 旅費がかかっていることはみんなに言われたし、自分たちでも意識した。でも直接会って聞く



地域の方に向かって取組報告

てこんなに楽しめる体育祭があるのかとびっくりした。
● 大槌のことが気になるようになった。テレビで取り上げていると最後まで観てしまう。
● あまり新聞やニュースを観なかったけれど、今は大槌のことを気にしながら観ているし、ニュースが流れた次の日は学校で話したりもする。



● (3年生なので)もう引退するけれども、次の生徒会にもこの活動を引き継いでもらいたい。
● 市内の他の学校にも、この活動を広げていきたい。

今後の展開は？

と、ニュースでは分からないことがいっぱいあった。
● 直接会って思いを届けることができよかった。現地の中学生と交流したことが一番に残っている。



写真の洗浄・整理をお手伝い

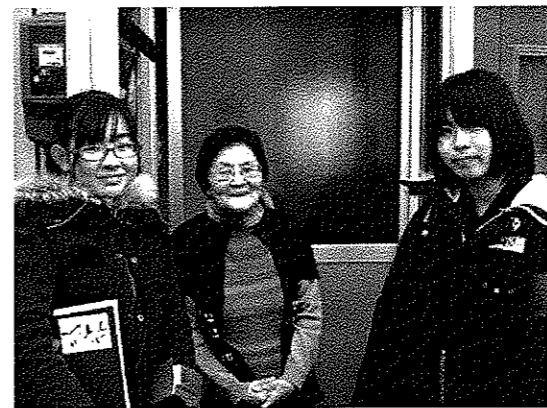
訪問スケジュール(平成24年2月17日~19日)

- 大槌中学校を訪問
- 義援金などの贈呈
- 学校の取組、生徒会活動の交流
- 旧校舎、大槌町内で被害状況の見聞
- 仮設校舎の見学
- 仮設住宅訪問、居住者から聞き取り
- 釜石市で被害状況の見聞
- ボランティア活動(写真洗浄・整理)

参加者：第一中学校生徒会役員
(今木さん、櫻井さん、若林さん、朝喜さん)
引率：早瀬先生、楠田先生

昨年の冬、生徒会の役員たちは一週間の募金活動を行った。集まった35万円の義援金の他、プラント、保健委員が作ったメッセージカード、第六中学校からの義援金、100冊の絵本などを被災した岩手県の大槌中学校に届けることになった。
現地では、大槌中学校の生徒と互いの学校の取組を交流したのち、津波の被害を受け無残な姿のまま閉鎖された旧校舎を見学した。机や黒板には、亡くなった友だちや学校への思いが記され、グラウンドには廃棄された車が山と積まれていた。町の瓦礫は撤去されていたものの、鉄骨や針金がむき出しになるなど解体できていない建物も多く、「一年経ったらそれなりに復興も進んでいるだろう。」という訪問前に漠然と描いていたイメージ

と大きく離れたものだった。
仮設住宅では、居住者からの聞き取りを行った。こたつを置く人ががすれ違うのもやっとの居室、結露が凍結するのを防ぐため日に何度も窓を拭き、買物物は週に何度かの移動販売で済ませる。愛着



仮設住宅の居住者からの聞き取り



保健委員が作ったメッセージカード

あの日(3・11)から一年半が経過した今も、震災は人々の暮らしや心に大きな爪あとを残しています。しかし、報道などで取り上げられる機会が減り、日々の暮らしを送る中で、少しずつあの日の記憶が風化してはいないでしょうか。32号の特集では、第一中学校で取り組まれた被災地への訪問・支援の取組についてご紹介いたします。

第一中学校生徒会 大槌中学校訪問の取組

笑顔で精一杯生きること 大槌の街・人々に学ぶこと

「あれからもう一年、復興も進んでいるだろう。」「ボランティアももう必要ないだろう。」「被災地大槌町を訪ねた、一中生の報告会はこのような語りから始まった。しかし、現実の大槌町を目の当たりにした時、訪問前の気持ちはふっと、いなくなる。残る震災の傷跡、陥没した道路、大量のガレキ。被害を受け、荒れ果てた中学校、焼け焦げた黒板、はがれた天井、無残な教室。そこには、ごく日常的な学校生活は無い。狭く、結露に悩まされる仮設住宅。そこで黙々と生活する人々。大槌町の実態を見て、彼女らの認識はくつがえる。そして、耐震化された一中学校舎、縁に包まれた質面の街並、家族との語らい、学習、クラブ、友との学校生活を思い浮かべる。ごくごく当たり前に電気、ガス、水のある生活は、実は豊かな生活なんだと実感する。人は一人では生きていけない。人のつながり、人は助け合って生きていく。何百回、何千回、何万回、目の前の大槌町の現実、坦々と生活する大槌町の人々は生徒たちに教える。そして、「一中生は「幸せ」「生きる意味」をかみしめ



人権教育推進会議市民委員 松岡 淑子

生徒たちは訴える。「継続的な被災者の応援や支援をすべきだと思います。」「災害を語り継ごう。」「この経験を活かし自然災害に備えよう。」と。何よりも、「復興」を「復幸」ととらえる大槌町の人々。「笑顔で精一杯生きること」「大槌中学校の生徒に勇気をもらったと。多くの人命を奪った震災、ガレキ処理や足踏みが続く復興の街づくり、何よりも家族を奪われ、豊かな故郷を奪われ、離散した家族。中学生自線の感性鋭い報告を聞き、あらためて「生きる意味」、「人のつながり」、「地域のつながり」を考えさせられたひと時であった。

生徒会のメンバーに聞きました

訪問後、自分の中で変わったことは？
● 家族がいること、電気や水や食料が普通にあることがすばらしいことだと思った。
● 友だちとケンカしたり、おかあさんと対立したりすることでもありがたみを感じるものなんだなあって思えるようになった。
大槌の生徒との交流で心に残っていることは？
● 体育祭のDVDを見たとき、放送機材が流されて無い中、声だけでやっていった。その声から本気で楽しんでいるというのがとても伝わってきて、一致団結し

のある家を失い、不自由な暮らしを強いられるにも関わらず、仲良しどうしでお泊り会をするなど、日々を楽しく暮らそうとする姿や暖かなもてなしに、訪問した中学生は「こちらが逆に元気をもらった」と語る。
翌日は釜石市でボランティア活動に参加。写真の洗浄、整理などを体験し帰路に着いた。
帰阪後、社会を明るくする運動、生徒会サミットなど様々な場面で活動を報告している。



川井さん（左から2人目）とメンバーのみなさん

「少ない本をポロポロになっても大切に読んでいるタイの子供たちには、やわらかい心で書かれたかわいらしい日本の絵本を贈りたい。そうやって日本の文化や考え方を伝えていきたい。」そう語るのは川井ピヤラットさん。NPOサフディプロジェクトの活動に携わって14年になります。活動は月1回。メンバーの手で一枚ずつタイ語訳のシールを張り付け

子どもの最善の利益をめくろく スクールソーシャルワーカーってどんな仕事？

配置の経緯

不登校、いじめなど学校現場で起こる様々な事象の背景として、子どもを抱える問題が複雑化・多様化していることが挙げられます。育児放棄、暴力といった虐待、経済的な厳しさなど深刻な問題を抱える保護者や子どもたちが存在しています。

そのことに対し、福祉的な手法から、子どもたちが置かれている環境に着目し働きかけ、学校内はもとより、学校外の関係機関等との連携を強化し課題に取り組むコーディネーター的な存在が求められるようになりました。

本市では平成17年度にスクールソーシャルワーカー（SSW）を初めて配置しました。平成24年度は4人に増員し、市内全ての小中学校で積極的に活用されています。

大塚SSWにお聞きしました

＜SSWの仕事＞

SSWはしんどさを感じている人を取り巻く環境にアプローチをします。それが、本人に直接働きかけるSC（スクールカウンセラー）との最大の違いです。

気になる子どもごとに開くケース会議で教職員、関係者、時には当事者も交え、子どもたちの感じているしんどさの背景を見立て、それを解決するため具体的な手立てを考えます。

そうして、ネグレクトのケースなら「AさんとBさんで家庭訪問し状況把握」や「Cさんが洗髪の仕方を指導」といっただれがどんな動きをするかということをはっきりさせます。



＜大切にしていること＞

大切にしているのは、子どもの最善の利益を追求すること、福祉の視点を持ち続けること。

近年、ケース会議で子どもや保護者がメンバーに入る場合が増えていきます。大人が結論を押し付けるのではなく、本人に寄り添い、本人が安心感を持って決断・実行できる環境づくりを行うのがSSWです。その結果、不登校状態の子どもが、翌日どんなことから始めるのかを自分で決めるといったことが可能になります。当事者が入ったケース会議はとりわけ大きな効果を上げていて、今後も進めていきたいと考えています。

＜学校の変化＞

7年間の関わりの中で、学校が大きく変わったと感じています。子どもの問題の背景・原因を見ようとするようになり、ケース会議が多くもたれ、子どもをチームで支援する体制が定着してきました。一人の教職員が問題を抱え込むことなく、元気に子どもと向き合っているように感じます。

＜今後の課題＞

箕面市全体で一人しかいなかったSSWは、ようやく今年度4人になりました。

活動を取材して

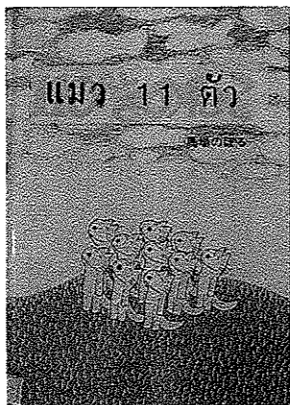
サフディプロジェクト代表者の川井ピヤラットさんが留学生として来日され、日本人と結婚し、異国の地で子どもを産み育てながら、母国へのボランティア活動をずっと続けてこられたことに感嘆しました。

夏休みでしたので娘も一緒に見学し、「箕面にこのようなボランティアがあったなんて初めて知ったし、生まれ育った国の子どもたちを思う気持ちは素晴らしいと思った。」と感動しておいりました。少しお手伝いすることができ良い経験ができたと思います。

人権教育推進会議市民委員 中野淳子



メンバーの方にシールの貼り方を教わる美音さん



シールが貼られた「11ぴきのねこ」

知っている？ 市民のちから
箕面で活躍する団体を紹介する新コーナーです。第1回はタイに絵本を贈る活動をしているサフディプロジェクトを取材しました。

「少ない本をポロポロになっても大切に読んでいるタイの子供たちには、やわらかい心で書かれたかわいらしい日本の絵本を贈りたい。そうやって日本の文化や考え方を伝えていきたい。」そう語るのは川井ピヤラットさん。NPOサフディプロジェクトの活動に携わって14年になります。活動は月1回。メンバーの手で一枚ずつタイ語訳のシールを張り付けられた絵本は、ある程度の量がたまれば現地へ送られます。「本当は直接持っていきたいけれど渡航費がかかる。それよりも、送った本を長く楽しんでもらうため、タイ語訳を印刷するシールなどに費用をかけていきます。」とのこと。70冊ほどの絵本はタイ語訳のデータがあるそうですが、その他の本を翻訳するには阪大タイ語学部の学生を含む多くの人の協力を得て約1か月かかります。「固い言葉で訳したら作者の心が伝わらない」とピヤラットさん。

本の最後のページには、シールを張った人の名前をタイ語で書き込みます。取材に同行してシール張りを

収集絵本リスト

絵本名	出版社
いいおかわ	福音館
おはけちゃんがいっぱい	小学館
くりとくらのえんぞく	福音館
11ぴきのねこ	こくま社
14ぴきのひっこし	童心社
ぞらめくんとめだかのこ	福音館
ちからたろう	ポプラ社
ねずみくんのチョコキ	ポプラ社
じごくのそうべえ	童心社

その他 計 73 冊 対応可

(寄贈いただける方は人権教育課 724-6921までご連絡ください)

りましたが、市内22校をカバーするには十分ではありません。

教職員の間にはSSWの役割が定着してきましたが、保護者、市民についてはこれからです。

中には「この子は発達障害」「この子は○○…」というレッテルを張っているように思われる方もいるようですが、支援につながる方ではない診断は意味がありません。適切な見立てがないことにより、問題が複雑になった例は大変多く、支援するために見立てを行うということは大前提といふべきことです。

学校支援体制の充実とともに、保護者の理解を進めていくことの必要性を強く感じています。



大塚SSW インタビュー当日も直前まで会議があったそうです

わたしの人権教育

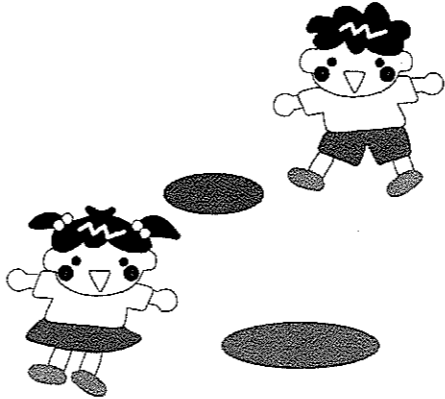
箕面市立桜ヶ丘保育所 山田 恵子 さん

今年13年ぶりに、あいあい園から保育所現場に戻ってきました。子どもたちの行動や反応が新鮮なものに感じられる反面、少々戸惑いながらもあります。

4歳児クラスの担当をしています。ある日のこと、Aちゃんが「Bちゃん、自分の使っていたおもちゃを取った」と訴えに来ました。そこで、2人にそれぞれ事情を聞いたのです。すると、Aちゃんは先の主張のように「使っていたものを取られた」と話し、Bちゃんは、「だって、Aちゃんに『かして』って言ったのにかしてくれなかったもん」と言います。友だちが使っていたおもちゃを勝手に取ってしまったらどう思うか、強引に取ってしまったらどう思うか、人の話を聞いて、私は「友だちが使っているものを無理に取るのはおかしくない？Aちゃんも嫌だったみたい。」友だちが使っているんだって、なら、『かして』って聞いたら貸してくれる？』って聞くのが青組だ

と思うよ。「Bちゃんは、それができると思う。」と、話さしました。Bちゃんも少し理解してくれたのか、さらなる「だつて・・・」のことは聞かれませんでした。

もう随分前のことになりましたが、ある人から『保育所は、人との関わり方を子どもに教える場ではないか』と言われたことがありました。自分の主張だけでなく、相手の反応や話を知ろうとする等、実際の経験の中で具体的な援助が必要だということ、今改めて思います。そのことが、子ども一人ひとりを大切に育てる保育へとつながっていくと思っています。



司書さんのおすすめ本



『パンプキン！』 — 模擬原爆の夏 —

令丈ヒロ子／作
宮尾 和孝／絵
講談社 二〇一

「パンプキン」とは、長崎に投下された原子爆弾とほぼ同型の爆弾で、投下練習・調査などのために1945年7月20日より日本各地、49カ所に落とされた模擬原爆です。オレンジに塗られていたことから、「パンプキン爆弾」とよばれていました。核物質は積まれていますでしたが、爆弾の威力で多くの人の命を奪いました。大阪でも東住吉区田辺に落とされ、慰霊碑が建てられています。

この物語は、田辺に住む5年生のヒロ子が、模擬原爆のことを知り、夏休みの自由研究として取り組む物語です。戦争のこと、原爆のことを調べていく過程で、ヒロ子は被害も加害も含め、様々な事実にぶち当たります。「知れば知るほど、びっくりしたり、それはなんでやのん」と思うことがばかりやん！

と言いつつも、ヒロ子なりに考えまわっています。

作者は『若おかみは小学生！』で人気のある令丈ヒロ子さん。これまでの戦争児童文学とは違い、「今」の子どもの目を通して、戦争を知り、平和を考えるきっかけになるように仕立てています。大阪弁がほんほん飛び交う軽快なノリでありながら、大事なことが読者に迫ります。

6年生に紹介したところ、すぐに借りられました。その後読んだ人が他の人に薦めたり、図書委員会のおすすめの本にあがったりと、読者がどんどん広がっていきましました。このテーマにして、予約が入るとは驚きです。

6年生の男子が友だちに言っていました。「これ、読んどいた方がいいよ。」って。

とどろみの森学園図書館司書 右田ユミ



「いじめるの正面、だあれ？パート2」

by かわのひでただ

今年の梅雨は、へんだったなあ。雨がどっさり降って、あちこちで水害が起こったね。困ってるひとたちもいるんだろな。でも、やっと真っ白な入道雲がはいりだして、公園の森で、セミたちが、シューシュー鳴きだした。そんな夏休み前の、ある日の昼下がり。子どもたちと、大人たちのつぶやきが聞こえてきました。

●車イスを使っているケンちゃん。

ボクの友だちのユウ君は、やさしくて、おとなしいんだ。いつも、ボクの車イスを押してくれる。昨日もユウ君に押しってもらって、学校から帰る途中で、となりのクラスの男の子が、乱暴に声をかけてきたんだ。ユウ君に、「おまえ、いつも親切そうなお顔をしないで、車イスを押して、いいカッコしてるけど、そんなの生意気なんだよな。」

というなり、ユウ君に足ゲリ、ピンタをして、ケケケツと笑ったんだ。ボク、腹が立ったなあ。

●ユウ君。

あの男の子には、前にも何回か、殴られたことがあるんだ。ボク、気が弱いから仕返してできないし、文句もいえない。根性無しなんだよなあ。

●ケンちゃんとユウ君と、男の子を遠くから見ている、キミちゃん。

また、ユウ君がイジメられているよ。前に、あの男の子にクツをとられて、ハダシで歩いてきたユウ君を見たよ。ユウ君、泣いてた。ユウ君もやり返せばいいのになあ。ちょっと怖いけど、先生とお母さんに、つげ口してやろうつと。

●ケンちゃん。

あの男の子は、ユウ君ばっかりにいいがかりをつけるんだ。弱い者イジメだよ。文句があるんだつたら、ボクにもいえよ。ボクが車イスを使っているからって、特別あつかいをするなんて。

●キミちゃんのお母さん。

そんな乱暴な男の子を相手にしちゃあいけないよ。ケガでもさせられちゃあ、イヤな目にあうだけだからね。

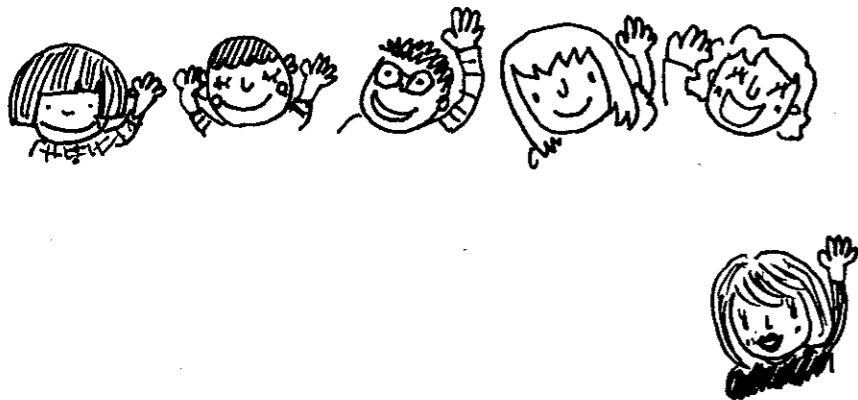
●キミちゃんに、話を聞いた学校の先生。

あの男の子のことは知っていますよ。ちよつと乱暴なところがあるけれど、気持ちのやさしいところのある子どもだから、キミちゃんが見たのも、お友だちどうしの遊びなんじゃないのかなあ。親切に車イスを押しているひとを殴るなんて、考えられないことだものねえ。

●ユウ君。

ボク、イジメられるの、ヤダあ。

★サケテ、本当はどうなんだろうか。うしろの正面、だあれ？



●あなたのクラスに、イジメられた子、イジメつ子はいませんか。
●あなたは、お友だちがイジメられているところを見たことがありますか。
●イジメは、どうしていけないんでしょうか。
●イジメのことについて、先生と一緒に話し合みましょう。